

群馬県立自然史博物館と群馬大学教育学部の連携による 博物館学授業実施の意義

群馬大学教育学部美術教育講座・准教授 春原 史寛

1. はじめに

群馬大学教育学部の「博物館実習」(学芸員資格取得のための科目)では、2016年度から群馬県立自然史博物館と連携した授業を実施し、学生の群馬の自然に対する理解と、学校教育における博物館の活用による自然史に関する様々な情報・資源の普及を目指している。本稿では本事業を紹介し、その意義を考察したい。

2. 教育学部における博物館学の意義

学校教員養成を行う群馬大学教育学部において、希望する学生は博物館学芸員資格を取得することができる。学校と博物館のむすびつきは「博学連携」として、学校と地域や社会をつなぐ役割の重要性が認められており、将来教員として活動する学生たちにとって博物館学を学ぶことは、学校教育に有効な資料・情報・人材・教育機能を有する機関としての博物館を理解することであり、地域の文化資源を活用して子どもたちに多様な学びを提供することに資する。もちろん、ごく少数ではあるが卒業後に博物館職員となる学生にとっては、その業務に直結する知見を得られる機会となっている。人文・社会・自然科学・芸術などの多様な専攻を抱える教育学部独自の博物館学の位置づけとしては、歴史民俗自然史博物館や美術館、そして文学館の活動と直結する教科である理科・社会・美術・国語の専門性のみならず、数学・英語・音楽・家政・技術・体育、さらに学校運営・教育心理・障害児教育を加えた、様々な領域を越境した視座から博物館を捉えることのできる合科的・総合的なあり方があげられる。

3. 群馬県立自然史博物館と群馬大学教育学部「博物館実習」の連携

さて2016年度から本学部「博物館実習」授業(例年10名程度の学生が履修)と群馬県立自然史博物館の連携による博物館での授業を実施しており、本年度は2年目にあたる(なお本学部は、2016年から群馬県立歴史博物館との連携の協定を結んでおり、美術教育講座では、群馬県立近代美術館における連携授業・連携事業の実施、前橋市立のアーツ前橋との連携事業の実施を積極的に推進している)。



博物館におけるバックヤード見学

自然史博物館での授業は学芸員が講師となつて半日をかけて行われている。館と学芸員の業務についてのガイダンス、展示見学、バックヤードツアーを経たのちに、収蔵資料を活用した展示企画案をグループ・ディスカッションによって考案・発表する。博物館実習を履修する理科専攻以外の美術専攻・社会・国語専攻等の学生たちが、親しむ機会の少ない自然史系博物館にかかわりを持つ機会としての意義も重視した。ここでの学修が、学校教員となった際に、自然史資料へのアクセスを容易にし、また自分の教科の専門性から自然史を捉えることが、資料の新たな価値の発見につながる。

展示企画案の提案においては、VR等のICTやワークショップによる教育普及的要素を展示内に組み込んだ提案や、資料の擬人化によるストーリー付与などの工夫が見られた。デジタル・ネイティブな大学生の世代特有の発想や、子どもの認知の仕方を配慮した実感的な情報伝達など、教育をベースとした着眼点が発揮されていたように思われる。

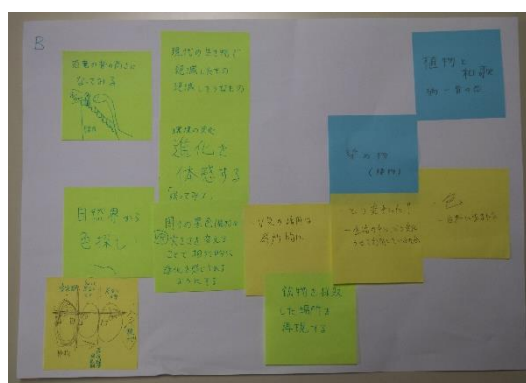
学生からは「博物館や学芸員の役割について知る機会が、その職を目指す人だけでなく多くの人々が持てるものであるべきだと感じました。博物館の役割を知ることは、自然や文化の重要性を知らせ、それらを大切にしなければいけないという意識を育て、遺産の保護や、身近なところでいえばものを大切に作る姿勢につながると思いました」といったふりかえりの声が多数聞かれ、本授業の目的は達成されていると考えられる。また、多くの学生にとって、高度な専門性を持つ学芸員から企画案に対する好評をもらったことが非常に印象的な経験となったようである。

4. おわりに

社会において細分化された専門性（例えば教科）はもちろん重要ではあるが、それを認めた上で、あらゆる領域に接して生活している総体性を持つ「人間」を扱う教育においては、分析されつくした対象をもう一度、全体に戻していくプロセスも重要である。自然史を、群馬の自然に関する資源を、サイエンス以外の多くの専門性から解釈しなおしていくことは、大学における教育でさらに推進していきたいと考えている。

キーワード：博物館と大学の連携、博物館学芸員資格、博物館学、教員養成課程

【関連文献】春原史寛「教員養成課程における博物館学芸員資格取得と教科教育の関連についての一考察—博物館と国語・美術・理科・社会をつなぐ」『群馬大学教科教育学研究』16号、2017年3月、75-84頁



展示企画案の考案と発表